

男女共同参画に対する最近のバックラッシュについて

ほそ や まこと
細 谷 実

バックラッシュとは？

「バックラッシュ」とは、どのようなことなのでしょう？辞書的な意味では、反動、反撃、揺り返し、などという意味です。

アメリカでは、ジェンダーをめぐる、道徳的保守主義＋経済的新自由主義のレーガン政権によって、それまでのフェミニズムの成果が思想的にも財政的にも攻撃されて後退させられた状況を指す用語として用いられています。ただし、もともと学問的に確立された概念ではないので、その用語にあまりとらわれないで、日本での特殊な文脈を具体的にみていく必要があります。

1970年代にウーマン・リブがあり、1980年代にはアカデミズムの中で女性学が作り出されました。そこでの性別役割分業批判論や生殖や身体をめぐる女性の人権論が、国連からの外圧も追い風となり行政によって採用されました。1985年に男女雇用機会均等法、1999年に男女共同参画社会基本法、2001年には配偶者暴力防止法が作られました。

その間に、人々のジェンダー意識も雇用状況も徐々に変わりました。とりわけ女性たちの間で、家族のための自己犠牲的な献身を当然と見なす嫁意識・主婦意識・母親意識が弱まりました。

他方、外での長時間労働によって家庭での不在メンバーとなってしまった男性たちは、専ら経済的な役割でしか家族との関係を取り結べなくなっていきました。

そのような変化の中で、20世紀の終わりにいくつかの論争的な問題が別々に話題となり、

それぞれにおいて保守的な論陣が登場しました。それらが、今日のバックラッシュのルーツと見なしうるものです。

問題を列挙しますと、次の6つです。

1. 選択的夫婦別姓や離婚をめぐる民法改正問題
2. 専業主婦の税や年金負担をめぐる法改正問題
3. 子育てにおける母性／父性の復権問題
4. 男女混合名簿などをめぐるジェンダーフリー教育問題
5. 少女たちの性的活動をめぐっての性教育問題
6. 国家的戦時性暴力としての従軍慰安婦問題

20世紀の間は、それらの問題についての保守的な主張は相互に別々に行われるものでした。ところが、政府のジェンダー政策が、1999年に男女共同参画社会基本法としてまとまりある姿となったのに呼応して、保守的な5つの主張は相互に連係(ネットワーク)をつくり出すようになりました。そして成立した動きが現在の日本におけるバックラッシュです。

この連係のために積極的に仲介を行い、さまざまな企画を立てて発言場所を提供したのがサンケイ新聞系メディアでした。そして、その連係の中には「新しい歴史教科書を作る会」系の人々、宗教的保守団体、新旧のナショナリスト、各種議会議員、草の根の活動家が見られます。

バックラッシュへの対応

21世紀になってからのバックラッシュの一

つの特徴に、「ジェンダーフリー」ということに対する攻撃の激しさが指摘できます。「ジェンダーフリー」という英語はない、政府はそんな言葉を使ってはいない、という形式論から、その内容への荒唐無稽な宣伝(例えば、ジェンダーフリーになるとトイレや風呂も男女一緒になります、とか)まで、いろいろあります。

それらを見ていくと、「彼らは男らしさや女らしさが本当に好きなのだ」とつくづく感じます。彼ら自身が「男らしい男」や「女らしい女」を好きであるのは自由です。

その結果、彼ら自身の実存が、最近の若者たちのファッションや言動に見られるユニセックス化現象を前にして、不安にさらされていることは理解できます。また、例えば、ピンクのバッグを持つのは女の子である、子育てに最適なのは母親である、男の子は泣くべきでない、などということが、彼らにとっては、太陽が東から昇ることと同様に自明なことであると感じられていることも理解できます。

そこには、歴史的な経緯と社会的な利害関心が働いています。だから、彼らを論破してそうした嗜好や信念を放棄させることはほとんど不可能でしょう。しかし、彼らの言い分に適切な批判をしていくことは必要です。要は、彼ら以外の世の人々に、男女共同参画の方向での変化が現在必要であると、理解してもらうことです。そのためには5つのことに配慮することが必要でしょう。

その1 行政用語(特に聞き慣れない漢字熟語)や学術用語(特にカタカナ語)をわかりやすい日常語でていねいに説明するか、置き換えていくこと。カタカナ語について言えば、学問輸入に際して明治時代にはあれこれ苦労して和語あるいは漢語を作り出して翻訳をしていました。ところが、近年は、学者の間で日本語で言い換える力が衰えたせいか、カタカナ語のまま日本語として使うことが増えてい

ます。ジャーゴン^(注)(あれ?これもカタカナ語だ)としてならいいのですが、一般の聴衆に向けてはもっと日常とのつながりを意識すべきでしょう。

(注)ジャーゴン:専門語、職業用語、仲間内で使用する語

その2 バックラッシュ派は自らの男女観・家族観・社会国家観に基づいて、かなりイデオロギー的に事態を見ています。そのことの裏返しとして、彼らは男女共同参画を特定イデオロギー(=フェミニズム)による策謀として描き出しています。しかし、男女共同参画というアイデアは、20世紀後期に現れた少子化や高齢化や終身雇用崩壊や年功賃金崩壊などの社会の大きな変化に対して必要な政策として考え出されたものです。その点を、現実に変化しつつある社会状況の分析に基づいて説明していくことが必要です。

その3 目標課題は、多くの人々に理解され共感されるものとして、一歩ずつ提示されることが必要です。人々の意識から二歩も三歩も先走ったことは、それだけで実践的目標としては間違っています。まして人々から浮き上がった実践は、容易にバックラッシュ派によってひっくり返されてしまう危険性が高いものです。

その4 2でも述べたように、バックラッシュ派は、言わば頭でっかちなイデオロギー先行の人々です。それに比べて現実主義的な産業界は、男女共同参画へ向けての個々の人事労務政策の変更には抵抗するものの、バックラッシュ派の主張にはほとんどくみしてはいません。共同参画推進の側で産業界との交流を拡大していくことも必要です。

その5 本節の冒頭で触れた「ジェンダーフリー」という考え方を、バックラッシュ派は問題の中心的論点としています。2で述べたこととつながりますが、イデオロギー的な戦場を好む彼らにとっては、格好な攻撃対象なのです。「ジェンダーフリーでは風呂もト

イレも男女一緒」などと彼らは宣伝しています。彼らと同じ土俵に立つ必要はないのですが、「ジェンダーフリー」という論点を無視していいものでもありません。社会状況の変化の中でジェンダーフリーの必要性を具体的に語ることによって、風呂やトイレで大騒ぎしていることの不適切さを明らかにしていくことが必要です。

そのためにも、最後に「ジェンダーフリー」という考え方について押さえておくべき基礎的見方を簡単に述べておきます。

「ジェンダーフリー」について

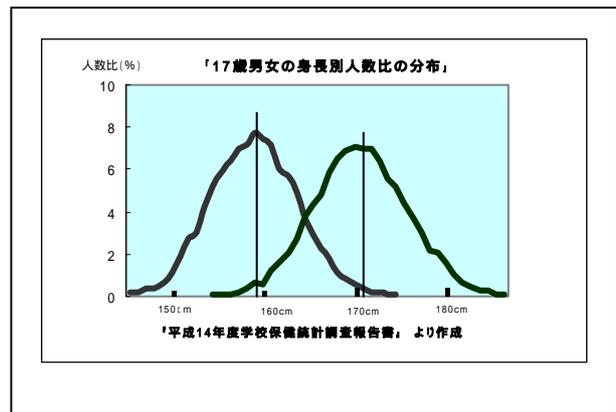
「ジェンダーフリー」は、英語にも用例はありますが、近年日本で広まったのは事実であり、バックラッシュ派の指摘のように和製英語と受け取る人がいるかもしれません。

しかし、「哲学」も「八紘一宇」も原語とは異なり、和製漢語と言えば和製漢語です。そのような柔軟な摂取によって日本文化は作り出されてきたのですから、そうした日本文化の伝統を全面否定しないかぎり、原語そのものの使用頻度と違うからと言って「ジェンダーフリー」を排斥するわけにもいきませんでしょう。

それはともかく、「ジェンダーフリー」の意味は、「性別にとらわれない。性別に基づく偏見から自由な」です。性別に基づく偏見の具体例は、先にあげた「ピンクのバッグを持つのは女の子」などですが、根本には、人々の世界観を支配する乱暴な二分法の問題があります。

その乱暴さは、以下の2点にあります。

その 特定の性質や能力を、二分された片方の性の特性として考えてしまう。例えば、子育てへの好みや適性は、平均的にはどちらかの性の方が高いかもしれませんが、個々の男女を見れば、平均像とは異なるケース



もざらにあります。ちょうど、男女の身長が平均的には男の方が高いとしても、個々の男女を見れば、反対のケースもざらに見られることと同じです(図参照)。そして、そうしたケースは、例外と見なすべきものではありません。そもそも「二分法で人間の性質や能力をスッキリと区分できる」と見なすこと自体が偏見・謬見であり、そこに無理があるので。

その 個人をどちらか片方の性の特質の担い手として考えてしまう。例えば、男はいわゆる男の特質リストの諸項目の持ち主として考えられる、あるいはそこに向けて教育されることがあります。しかし、個人の保有している特質について考えると、いわゆる男の特質の諸項目を全面的に揃えた男は稀です。ぼくの場合は、もっている諸特質のおよそ6割が男の特質 / 4割が女の特質です。ぼくだけではありません。尋ねてみると、多くの個人は、2 : 8、4 : 6、7 : 3、などの割合での双方の性の特質のブレンドなのです(ここで、「男の特質」と言うのは、当該社会において平均として男の方に多く見られる特質のことを指しています)。

「ジェンダーフリー」とは、上記のような二分法の乱暴さから自由になることです。決してすべての個人を同じに見たり同じに遇したり、また乱暴な三分法における「中性」として見たり遇したり、ということではありません。

こう説明しても、「男は度胸 / 女は愛嬌」みたいな乱暴な二分法が好きな人々は決して

考えを変えることはないでしょうね。

しかし、面白いことに、バックラッシュ派の人々の中にも、けっこう「女々しい男」や「雄々しい女」がいたりします。

また、ジェンダーフリーによって、男性と女性との間にあった高い壁(または深くて暗い河)を低くすることは、お互いがコミュニケーションをスムーズに行うためにも重要なことです。

異なる関心、異なる活動、異なる趣味、異なる性格を男女が持っている場合、そのズレを楽しむということもありますが、互いの意思疎通は困難になり、ディスコミュニケーションから生じる男の不幸、女の不幸が、家庭でも職場でも生じてきます。例えば、家族の間で孤立してしまうお父さん、夫との交流に絶望する妻、職場でのセクハラ、職場での男女間での無用な緊張、などです。

若い学生たちを見ていると、彼らの間では男女間の壁がかなり低くなってきていることを実感させられます。女子学生が男子学生も一緒にいる時に「私、けっこう生理が重くてツライんだ」などと話したりしています。それを聞いて男子学生たちは「ふーん、たいへんだね」とか、さりげない反応で応じています。

こうした変化をどのように評価すべきなのでしょうか？

ぼくは、そうした対話が男女双方の不幸を減らしていくものであると考えています。

(関東学院大学助教授)